

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 7 日現在

機関番号：14602

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25370218

研究課題名(和文) 中世和歌と仏教の相関についての領域横断的研究

研究課題名(英文) Relation of Medieval Waka to Buddhism: A Cross-Disciplinary Study

## 研究代表者

岡崎 真紀子 (OKAZAKI, Makiko)

奈良女子大学・人文科学系・准教授

研究者番号：30515408

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、仏教に関連することがらを表現した和歌についての研究である。日本の中世には、説話集や、古典注釈(古典文学についての注釈を施した書物)、神道書(神道の思想や教えを記した書物)、直談書(『法華経』を中心とする仏教経典の経義についての談話を記録した形をとる書物)などといった、さまざまな文献が成立した。本研究では、これらの文献に収められている和歌と、歌集に収められている和歌の双方に焦点をあてて考察した。それによって、和歌と仏教が深く結びついている中世の言語のありかたについて、ジャンルを横断した視点から具体的に明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This study examines the relation of certain waka (type of Japanese poems) to Buddhism. In medieval Japan, various types of literature came into existence, including setsuwa-shu (collections of stories), classical commentaries (books discussing classical literary works), Shinto-sho (books on the doctrines of Shinto), and jikidan-sho (records of discourses on doctrines as found in Buddhist scriptures). In this study, we focused on the waka recorded in these literary works and in collections of waka. Thus, the state of language in medieval Japan when waka and Buddhism were profoundly linked was clarified from a cross-disciplinary perspective.

研究分野：中世文学

キーワード：和歌 仏教

## 1. 研究開始当初の背景

和歌と仏教の相関について考える際に、これまで主に研究の中心にあったのは「釈教歌」をめぐる研究であった。仏教関係の和歌を収めた撰集の本文を集成した『釈教歌詠全集』(東方出版、1934年)の刊行ののち、戦後の研究に至って、久保田淳氏、山田昭全氏、石原清志氏、三角洋一氏、山本一氏、石川一氏などによって、勅撰和歌集入集歌や、西行・慈円など個々の歌人の詠歌に焦点をあてた研究が進められてきた。近年では、国際的な研究交流も活発である。名古屋大学文学研究科 COE 国際研究会「日本における宗教テキストの諸位相と統辞法」(報告書 2008年、阿部泰郎編)にもとづいて、宗教テキストとしての和歌の意義を問うた論集『聖なる声 和歌にひそむ力』(三弥井書店、2009年)も刊行された。同書には欧米における釈教歌研究を牽引しているジャン＝ノエル・ロペール氏(コレッジ・ド・フランス教授)の論文も掲載されている。

また、研究開始以後のことにはなるが、本研究をおこなった時期と軌を一にするようにして、お茶の水女子大学比較日本学教育研究センター主催・国文学研究資料館ほか共催で、第17回国際日本学シンポジウム「日本化する法華経」が開催され、それにもとづく論集である浅田徹編『日本化する法華経』(勉誠出版、2016年)が刊行された。これも、本研究のテーマが日本文学研究史上時宜を得たものであることをものごとく付言しておきたい。

以上のように、国内外において当該分野への関心が高まっていることが、本研究の背景にある。

ただ、先行する研究においては、説話集や古注釈、神道書や直談書といった領域の文献に見られる和歌を視野にいれた学際的な方法による研究はあまりなされておらず、いまだ考察の余地を多く残しているように思われた。そこで、「中世和歌と仏教の相関についての領域横断的研究」と題する本研究をおこなうことを着想したのである。

また、研究代表者自身のこれまでの研究からの経緯も、本研究をおこなった背景としてあげられる。研究代表者は、源俊頼を中心とする院政期の和歌・歌学の研究から始めて、鎌倉中期の歌学・古典注釈への関心を広げてきた。拙著『やまとことば表現論 源俊頼へ』(笠間書院、2008年)の刊行後、「平安鎌倉期における歌学と仏典注釈の相互交流についての学際的研究」(平成20~21年度科学研究費補助金・若手研究スタートアップ)、「鎌倉中期の古典注釈に現れる言語意識についての総合的研究」(平成22~24年度科学研究費補助金・若手研究B)といった研究を進めてきた。そこで一貫して抱いてきたのが、和歌と仏教の相関を考えるという問題意識で、とくに歌学書や古注釈を対象として考察し

てきたのである。これらの研究成果を土台として、平成25年度から開始する本研究においては、「釈教歌」を含め、より幅広い領域に現れる具体的な和歌表現を対象とすることによって、同じ問題意識をより多角的に考えて深めたいと構想したのであった。

## 2. 研究の目的

本研究は、中世における和歌と仏教の相関について、歌集だけではなく広範なテキストを対象として再検討することを目的としたものである。従来の研究において見られる、「釈教歌」を中心にとりあげる捉え方は、和歌というジャンルに関心を絞るあまりに、ややもすると視点の幅を狭くするきらいがなかったか、といった問題意識に端を発している。

というのも、仏教に関連する和歌というのは、きわめて多彩なのである。勅撰和歌集の「釈教歌」部に所収する歌に限って見ても、経典や教義を題とする法文歌や、亡者追善の歌、仏菩薩が詠んだと伝承される託宣歌などさまざまな歌がある。さらに、中世以降旺盛に現れる説話集や古注釈、神道書や直談書などといった宗教的言説に目を広げれば、五七五七七の定型の歌(いわゆる呪歌、道歌など)が少なからず収められていることが注目される。

たとえば、中世真言系神道の言説に、胎蔵界五仏をあらわす種子にあてた振り仮名として、「そのかみのうかりしこともわすられてあなうれしさのみにあまりたる」という歌が見られる(『豎印信』など)。このように、「中世においては夥しい数の呪歌の類が制作され、修験道や神道の諸作法の場で陀羅尼として唱えられていた実態があった」(伊藤聡『中世天照大神信仰の研究』法蔵館、2011年)のである。

これらの詩歌は、勅撰和歌集を中心とするいわば和歌伝統の秩序のなかには組み込まれないものだ。実際、歌集に採録されることは無いのである。言い換えれば、五七五七七の形の詩歌ではあるが、「釈教歌」という範疇に含まれる和歌とは位相の異なる言語表現だったと言えるのかもしれない。そのため、従来は和歌研究の側からこれらが掘り下げて考察されることは比較的少なかった。

しかし、和歌と仏教の相関をダイナミックに捉えるためには、いわゆる「釈教歌」だけでなく、上記のような詩歌も網羅した視点から考える必要がある。以上のような問題意識にたつて、本研究では、これまでの研究動向を踏まえながらも、ジャンルと領域を横断した学際的視野から和歌と仏教の相関を考えると、従来にはない視点を導入することとした。

和歌という言語表現も、仏教という宗教思想も、共に日本中世の文化の根幹にあることは、改めて繰り返すまでもないだろう。本研

究は、和歌と仏教の相関について、領域横断的かつ学際的な視点から再検討することによって、中世における言語のあり方や中世における文化の根底にあるものを、再検討することを目的とするものである。

### 3. 研究の方法

上記のような研究を進めるにあたって、その方法として、二つの柱をたてた。

一つは、中世の勅撰和歌集および私撰集における「釈教歌」の部立に所収する和歌を網羅し、注釈的に検討することである。もとより、仏教関係の和歌は、歌集の「釈教歌」の部立に収められた歌だけには限らないことは、先に述べたとおりである。しかし、まず手始めとして、勅撰和歌集・私撰集に絞って考察することによって、中世和歌において「釈教歌」という範疇の意識がどのように変遷したかを明らかにする必要があると考えたのである。考察の対象とする時期は、勅撰和歌集で言う『千載和歌集』から『新続古今和歌集』までの時期とした。そして、個々の和歌についての注釈的な検討にくわえ、それぞれの歌集の「釈教歌」の部立における和歌の配列の検討も含めた考察をおこなった。

二つには、説話集や古注釈、神道書や直談書などに現れる和歌を抜き出して集成したうえで、それらの歌を、和歌陀羅尼観や密教思想、中世神道説といった思想的背景とともに読み込むことである。対象とするテキストは数多いが、まず思想史においても重要で和歌を多く収める『沙石集』からはじめた。次に、『類聚神祇本源』等の神道書を取りあげた。ついで、『一乗拾玉抄』『法華経鷲林拾葉抄』『法華経直談抄』等の法華経直談書について検討した。

以上の二つを柱として研究をおこなう際の、具体的な研究方法は次のとおりである。方法上留意したのは、日本古典文学研究において基本的なことではあるけれども、研究対象とする資料はできるかぎり信頼できる本文にもとづいておこなう姿勢を徹底することである。

まず翻刻・影印で、信頼できる本文が手に入りやすい資料については、書籍を購入することによって資料収集と検討をおこなった。たとえば、和歌関係の本文は、刊行された書籍が多いので、それをもとに釈教歌を網羅的に集めた。中世神道に関連する資料は、『真福寺善本叢刊』(臨川書店)や『神道大系』『続神道大系』において基礎文献の影印・翻刻があるので、それを参照した。直談書については、『法華経鷲林拾葉抄』はじめ、版本の影印がある。古典注釈については、古今集注釈については片桐洋一『中世古今集注釈書解題』(赤尾照文堂)が先鞭をつけて以降、『古今集古注釈書集成』(笠間書院)も出て至便になったので、それらを参照した。

くわえて、書籍で刊行されている翻刻・影

印だけでは行き届かない資料については、マイクロフィルムによる閲覧や実地調査もおこなって、研究期間内にできるかぎり広範に目配りした。

おもな原本の実地調査地は、肥前島原松平文庫、国立公文書館内閣文庫、東京国立博物館である。とくに肥前松平文庫蔵『発心和歌集』、東京国立博物館『極楽願往生歌』の閲覧と調査をおこなったことは、本研究の最終年度に、研究代表者が単著で刊行した注釈書である、岡崎真紀子著『発心和歌集 極楽願往生和歌 新注』(青簡舎、2016年「5. 主な発表論文等」の項に後掲)といった具体的な研究成果として結実した。

マイクロフィルムについては、国文学研究資料館におもむいて閲覧したり、複写をとりよせたりして、同館所蔵の資料を活用した。

収集した資料のなかで特に、鎌倉中期の説話集『沙石集』については、伝本による本文異同が少なくないことが知られているので、活字だけではなく、新編日本古典文学全集が底本とする米沢本の複写を入手して、それにもとづいて考察をすすめることを心がけた。

なお、本研究は、研究代表者がひとりでおこなう研究であり、研究分担者と共同しておこなう体制はとらなかった。当初の研究計画では、研究が計画どおりに進まない場合の対応として、資料整理等の作業で大学院生のアルバイトによる協力を求めることも予定していた。だが、最終的にはそういった協力を求めることなく研究を遂行し、以下に述べるような研究成果をあげ、本研究を終了するに至った。

### 4. 研究成果

繰り返しになるが、本研究の学術的な特色および独創的な点は、仏教に関する和歌を考えるにあたって、対象とする文献を幅広くとって、ジャンル横断的に考察するという、学際的な研究方法にある。いわゆる「釈教歌」を対象とする研究と、説話集や神道書や直談などに現れる歌に着目した研究は、それぞれについて、和歌研究の側からの先行研究と、説話文学研究や日本思想史研究の側からの先行研究があるものの、両者をともに取りあげてジャンル横断的に考える視座からの研究は、これまでにほとんどなかった。本研究は、その新たな視座から斬り込むことによって、次のような成果をあげることができたと考える。

まず総論的に研究成果を記し、次に具体的な研究成果についてあげる。

#### (1) 総論的にみた研究成果

勅撰和歌集や私撰集の「釈教歌」に収められている和歌と、説話集や神道書や直談などに現れる歌は、そもそも享受された場も言葉の位相も異なるものである。本研究では、その双方を対象として、領域横断的に考察した。

その結果、両者が必ずしも有機的かつ密接に結びついていたわけではないということを、改めて確認した。こう述べると、既定の結論を確認しただけのように見えるかもしれないが、これを、具体的な資料とその検討にもとづいて実証的に確認したことは、実は非常に重要なのではないかと思われる。以下に、具体的な例をあげて述べてみたい。

たとえば『法華経鷲林拾葉抄』に、「俊頼云」(源俊頼の歌に云わく、の意)として歌が掲げられている場合がある。俊頼の名を、歌の作者としてあげているという点で見れば、『法華経鷲林拾葉抄』の叙述は、いわゆる和歌伝統の領域と繋がりのある和歌を引用した体をとっていると言える。しかし、掲げられている和歌は、俊頼の家集『散木奇歌集』やそのほか勅撰和歌集・私撰集に俊頼の詠作として伝わっている歌を見渡しても、どこにも見られない。表現の質も、歌集に収められている俊頼の詠作とは全く異なる歌である。

また、もう一例、前掲『豎印信』などの神道書に見られる、「そのかみのうかりしこともわすられてあなうれしさのみにあまりたる」という歌をとりあげて考えてみたい。この歌の表現は、五七五七七の定型であるという点ではもとより和歌というべきものである。しかし、春は桜、秋は紅葉といった伝統的な景物を用いて詠む和歌とは、用いる言葉も発想も、性質を異にする。

このように、直談書や神道書に歌が収められている歌は、勅撰和歌集を中心とする和歌と、全く無関係ではないけれども、深く関連しているわけでもないのである。そして、両者のあいだには質的な違いがある。

しかし、仏教に関わる内容を五七五七七という形で詠んだ歌である点では共通しているながらも、質の異なる詩歌が同時代に併存していた、という現象そのものに着目すべきではないだろうか。それによって、中世の言説状況の一端について考察できるからだ。

そもそも、中世に数多く成立した神道書や直談書や古典注釈に、なぜ歌が必要だったのだろうか。すなわち、神や仏といった超越的なものに対する祈りや誓いを捧げたり、教義を説いたりする言説のなかに、散文的な文章だけではなく、なぜ歌が含まれているのか。それは、端的に言えば、五七五七七の歌という形で表現すること自体に意味があり、歌を詠むことそのものに意義があったということに尽きるであろう。ここに、和歌というものが、当時の日本の言語文化の根幹を支える要素のひとつであったことを見ることができるのである。

また、神道書や直談書や古典注釈に収められているような歌は、当時の人々の間で広く浸透し、よく知られた言い回しであった可能性も考えられる。だが、勅撰和歌集における「釈教歌」の部立やその他の歌集には入集することはない。なぜ入集しないのか。言い換えれば、いわゆる和歌伝統の範疇に、なぜ掬

い上げられることがなかったのだろうか。

勅撰和歌集を中心とする和歌の領域というのは、五七五七七の歌形であればどのようなものでも歌として受け容れるわけではなかった。和歌には、長く詠み継がれた過程で醸成されてきた、和歌を伝統と捉える意識がある。それは、「和歌らしくない」ことばや発想を用いて詠むことは受け容れない、といった意識も含んでいたのである。和歌の領域とは、そのような意識にもとづいて成り立っているところがあるのだ。

つまり、神道書や直談書や古典注釈に収められているような歌が、勅撰和歌集をはじめとする歌集にはなぜ掬い上げられないのかという問いは、それらの歌を掬い上げないような、和歌の領域におけることばの機構とは一体いかなるものか、という本質的な問題を、逆に浮上させるのである。

以上のように、本研究では、仏教に関する和歌について、対象とする文献を幅広くとって、ジャンル横断的に考察を進めた。その成果として、和歌を窓口として、中世における言語のありようを深く掘り下げて検討できたと考えられるのである。

## (2) 具体的な研究成果

上記の総論的な研究成果にもとづく論考は、まとめつつあって、今後随時公表したいと考えている。本研究期間内に発表した雑誌論文・口頭発表・その他は、以下の「5. 主な発表論文等」の項に掲げたとおりである。主に、本研究を進めた過程で明らかになった具体的なことがらについて、発表した。

そのなかで特筆すべき点としては、本研究で考察の対象としてきた古典注釈のなかでも、特に『毘沙門堂本古今集注』について、考察が深まったことがまず挙げられる。次に、勅撰和歌集の「釈教歌」部に歌が採録されている『発心和歌集』、および『極楽願往生和歌』について、注釈を施した単著を刊行したことを挙げたい。いずれも、本研究を基盤とすることによって達成できた研究成果である。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計8件)

1. 岡崎真紀子、『毘沙門堂本古今集注』に現れた語学的方法、和歌文学研究、査読有、113号、2016、2-8

2. 岡崎真紀子、『極楽願往生歌』と院政期の六波羅、中世文学、査読有、61号、2016、58-67

3. 岡崎真紀子、「浦島」をめぐる分節と連想源氏物語研究における文化研究の可能性、竹林舎『新時代への源氏学9 架橋する文学理論』、査読無、2016、253-281

4.岡崎真紀子、旧都の礎 平安後期和歌に見る平城京、都城制研究、査読無、10号、2016、47-56

5.岡崎真紀子、『極楽願往生歌』の一首、叙説、査読有、42号、2015、86-101

6.岡崎真紀子、顕昭の歌学と音韻相通説、人間文化研究年報（奈良女子大学大学院）、査読無、29号、2014、1-11

7.岡崎真紀子、竜女成仏と和歌、研究教育年報（奈良女子大学文学部）、査読無、10号、2013、63-68

8.岡崎真紀子、院政期における歌学と悉曇学、和歌文学研究、査読有、107号、2013、28-40

〔学会発表〕(計 2 件)

1.岡崎真紀子、『毘沙門堂本古今集注』に現れた語学的方法、和歌文学会例会、2016/06/18、立教大学（東京都豊島区）

2.岡崎真紀子、『極楽願往生歌』と院政期の六波羅、中世文学会秋季大会、2015/11/01、静岡文化芸術大学（静岡県浜松市）

〔図書〕(計 3 件)

1.岡崎真紀子、青簡舎、発心和歌集 極楽願往生和歌 新注、2017、250

2.廣木一人・松本麻子編、古典ライブラリー、連歌大観第一巻、2016、共著者計 22 名のうち、岡崎真紀子担当箇所：163-173、535-539（「金葉和歌集」・「散木奇歌集」の翻刻と解説）

3.高岡尚子編、ひつじ書房、恋をする、とはどういうことか？ ジェンダーから考えることばと文学、2014、岡崎真紀子執筆箇所：100-112

〔その他文筆〕(計 3 件)

1.岡崎真紀子、和歌文学会例会発表特集「日本語学研究からみる和歌文学」レポート、レポート笠間、査読無(依頼原稿) 61号、2016、119-121

2.岡崎真紀子、資料と論理のあいだ 大学院のこと、レポート笠間、査読無(依頼原稿) 57号、2014、11-14

3.岡崎真紀子、学界時評（和歌）レポート笠間、査読無(依頼原稿) 55号、2013、81-84

〔産業財産権〕

出願状況（計 0 件）

名称：なし

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：なし

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等 特になし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岡崎 真紀子 (OKAZAKI, Makiko)

奈良女子大学・研究院人文科学系・准教授

研究者番号：30515408

(2) 研究分担者

なし( )

(3) 連携研究者

なし( )

(4) 研究協力者

なし( )